

野村亜由美 論文内容の要旨

主 論 文

Post-Traumatic Stress Disorder Among Senior Victims of Tsunami-Affected Areas in Southern Sri Lanka

スリランカ南部津波被災地域における高齢者の心的外傷後ストレス障害

野村亜由美, 本田 純久, 早川 肇, Sarath Amarasinghe, 青柳 潔

(Acta Medica Nagasakiensia, 55 巻, 41-46, 2010 年)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 新興感染症病態制御学系専攻
(主任指導教員: 青柳 潔 教授)

緒 言

2004年12月26日、スマトラ島沖で大地震が発生し、この地震による津波によってスリランカを含むインド洋沿岸の近隣諸国では、高さ10メートルにも及ぶ津波が押し寄せた。津波による死者は推定22万人以上、負傷者13万人以上という未曾有の大災害をもたらし、インフラストラクチャー(社会的経済基盤、社会的生産基盤)を破壊した。スリランカでは、とくに南西の沿岸地域で甚大な物理的・人的被害を受け、3万人以上というインドネシアに次ぐ多くの死者(主に溺水と外傷性の負傷による)を出し、4000人以上が孤児となった。

津波によって被害を受けた国々における先行研究では、被災者の身体的ダメージ(外傷)の回復の後、被災者を含むその家族の精神的ダメージに関する問題が関心を集め、多くの研究がなされた。しかし先行研究では、主に若年層(ティーンエイジャー)が研究対象とされていた他、津波被災直後の精神的ダメージに関する研究が多く、高齢者を対象とした精神的な後遺症に関する研究は少なかった。

そこで本研究では、スリランカで最も被害の大きかった南部州マータラ県において、津波被災を受けた60歳以上の高齢者を対象に、質問紙を用いた構造化面接調査を行い、津波による精神的被害の状態とその要因を明らかにすることを目的とした。

対象と方法

本研究では、スマトラ島沖地震後に津波の被害を受けたスリランカ南部マータラ県の住民を対象に、基本属性(年齢、性別、家族構成、婚姻歴、宗教、職業、収入、最終学歴、既往歴など)に関する質問紙を作成して、構造化面接を行った。また、自記式評価尺度として Impact of Event Scale 改訂版 (IES-R) を用いて心的外傷後ストレス障害の調査を行った。質問紙は、英語版をシンハラ語に翻訳し、訳語に問題がないことを確認して用いた。調査期間は2008年4月～6月(津波被災から40～42カ月経た時点)であり、60歳以上の高齢者

90人(男43人、女47人)を対象とした。

本研究は、調査協力を依頼した現地(スリランカ南部州マータラ県)のルフナ大学社会学部の承認のもと実施した。対象者に対しては、研究に関するインフォームド・コンセントを口頭(母国語であるシンハラ語)で行い、同意を得て調査を行った。

被災体験の因子とIES-Rスコアの関連については、ウィルコクソンの順位和検定を用いて分析した。さらに、津波の被災体験が心的外傷後ストレス障害(PTSD)に与える影響を明らかにするために、重回帰分析を行った。最適な多変量モデルの選択はAICに基づいて行った。

結 果

津波被災時に家にいた人、死者や負傷者を目撃した人、避難が遅れた人、家族や友人が負傷した人、本人が負傷した人、子供や配偶者または家族を失った人、家族が行方不明になった人、津波により生計を失った人ではIES-Rスコアの中央値が有意に高かった。また重回帰分析の結果、高齢者の中でも若い年齢層の人、津波によって家族を亡くしたか家族が負傷した人でIES-Rスコアが有意に高かったことから、津波の被災体験が高齢者のメンタルヘルスに影響を及ぼしたことが示唆された。

考 察

阪神淡路大震災後に高齢者の精神被害に関して調査した研究では、若年者よりも高齢者の方が精神被害が大きかったことを報告している。その研究の中で特に問題になったのは、地震の犠牲にあった高齢者の「孤独死」に関するものであった。今回のスリランカでの調査においても、同様に高齢者の「孤独」が精神被害を悪化させているのではないかと予測されたが、反対に高齢者の中でも若い年齢層のIES-Rスコアが高かった。本研究の対象者の多く(93%)は家族(親族)と共に生活しており、家族員数の中央値は5人であった。そのため、阪神淡路大震災後の高齢者と比較して、スリランカの高齢者は家族(親族)からのサポートを多く受けており、精神的被害を軽減させていたと考えられる。

メンタル・ヘルス回復プログラムは社会的な統合への試みであるだけでなく、共同体全体への努力を必要とする。特に、甚大な災害をもたらした後、様々な年齢層と異なった期間のニーズを考慮に入れることは不可欠である。長期的視野で彼らのメンタル・ヘルスの回復へ貢献することを考慮すれば、本研究は予備調査にすぎない。しかし、本研究が高齢者のメンタル・ヘルスに影響を及ぼすメカニズムへの手掛かりを与える初期の研究であり、これらの調査結果が将来、潜在的に重要な提案、解決法、および手がかりを提供できると考える。今後は、実証的な調査を含め、系統的な更なる調査を行っていきたいと考える。